ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

資産はいつも誇大表示
（中小企業の３つの壁）

下に２つのバランスシート（以下Ｂ/Ｓ）を掲載したが、【１】はありがままのＢ/Ｓ、そして【２】は、【１】から「資産ではない資産」を削ったＢ/Ｓである。勿論同じ会社である。でっち上げでもなく作り話でもない。既に倒産してしまって今は存在しないが、現実にあった会社のものである。先ず、この２つのＢ/Ｓ良く見比べて欲しい。

【１】修正前Ｂ/Ｓ　（単位：百万円）

現預金	124	仕入債務	475
売上債権	144	借入金	462
その他	335	その他	66
有形資産	2	資本金	21
投資等	35	剰余金	▲384

【２】修正後Ｂ/Ｓ

現預金	124	仕入債務	475
売上債権	144	借入金	462
その他	60	その他	66
有形資産	2	資本金	21
投資等	5	剰余金	▲689

修正前のＢ/Ｓを見ただけでも「この会社の前途は危うい」と思わざるをえないが、修正後のＢ/Ｓを見ると更に絶望的になる。現預金と売上債権（売掛金）以外に資金化可能な資産と見られる資産が殆どなかったのだ。それらは商品・未収入金・貸付金・仮払金（以上流動資産）、株式・保証金（以上固定資産）という名で３億円以上も資産に潜り込んでいた。そして、こんな内容の会社であっても何年も存続してきたことに、今更ながら驚きを禁じ得なかった。

一体、何故こんなことが起るのか。

私はここで、「こんな会社」に融資してきた銀行や「こんな会社」の決算書を作ってきた経営者を批判しよう等とは思っている訳ではない。こうした事例は中小企業では特段珍しいものではなく、この会社ほど極端ではないにしても、大なり小なり同じ様なことは広く発生しているのだから、個別の誰彼に責任があるのではない。それは社長自身が最もよく知っている筈だが、問題は「いつの間にかこういう風になってしまう」所にある。

いつの間にかこういう風になってしまうのを防ぐのは難しい。それは、中小企業の前に３つの壁が立ちはだかっていると思うからだ。

第一の壁は「金融の壁」である。中小企業の多くは自己資本が足りない。即ち、多くが他人の金（＝負債）で事業を営んでいる。他人の金の代表が金融機関からの借入金であるが、借入先である金融機関の心証を害さないよう決算数値を取り繕いたくなる。そうした作業を重ねていると、いつの間にか「資産ではない資産」が増殖してくることになる。

この壁を意識しないで済むのは、無借金会社かそれに準ずる自己資本比率の高い会社である。そこへの道のりは決して近くはないが、「金融の壁」を意識しない所まで進みたいものだ。

第二の壁は「税務の壁」である。

法人税を含む税法は、私などが言うまでもなくその時々の政治や政策に大きな影響を受ける。毎年の税制改正に気を配るのは当然として、しかし税制に従った会計処理を続けてゆくことにも問題が生じてくる。「ゴルフ会員権は施設利用権だから保有している限りいかに価格が下がっても損金処理はできない」というのは分り易い事例であるが、税務に従った処理を続けて行っても不良資産がＢ/Ｓに蓄積されてくる。

税金を算出する計算式と会社の儲けを算出する計算式は自ずと違うのだ。そこにも大きな壁がある。

そして、第三の壁は「会計の壁」である。

企業会計原則も財務諸表論も、あるいは財務会計も管理会計もよく分からない。それが中小企業の社長の実感ではないか。専門的で難しいことばかり言っているように感じるのではないか。私もその片棒を担いでいる１人ではあるが、それでもここに壁があるような気がして時に滅入る。

三つの壁は乗り越えるべきか。勿論、乗り越えて欲しいが、中小企業の社長は何から何までやらなければならないので恐ろしく多忙である。今更、小難しい理論を学ぶ時間はない。ただ、だからといって「時間と共に誇大表示になる資産」を放置しておいていいということにはならない。ここの所の基本をしっかり押えておかないと、冒頭のＢ/Ｓのような会社になりかねない。

《複製・転載等はご連絡下さい》
TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp